

飯島陣屋だより

NO.15
2012.3

発行/飯島町歴史民俗資料館 〒399-3702 長野県上伊那郡飯島町飯島 2309-1 TEL 0265-86-4212 FAX 0265-86-5596



平成24年1月、初めて挑戦した巨大な書初め

紙の大きさはなんと縦4m、横6m30cm

年の初めに恒例の「書初め&繭玉づくり」。今年は大きなソモモの木で繭玉飾りを作ったあと、特大の書初めに挑戦しました。チャレンジする子供たちと先生は靴下を脱いで準備OK。近年流行の書道パフォーマンスを模してミュージックスタート。まずは子供がチャレンジ。足を踏ん張って、赤い書道液を含ませた大きな筆を体ごと思いきり動かしました。最後に持参の先生の出番。バケツに2升用意した墨滴に巨大な筆を浸し、墨を飛び散らせながら豪快に「絆」と筆を走らせました。書き終えた後は歓声が起こりました。

「タイムトラベルクラブ」で歴史体験!

今後、歴史や伝統行事を体験する「タイムトラベルクラブ」を始めます。気軽に楽しめる体験や、マニアックに昔の人と同様の手間をかける体験など、参加者の声もお聞きしながらやっていきます。地域の歴史は宝の山。「歴史は未来への指針」というと高尚ですが、われわれが今を楽しむネタの宝庫でもあります。楽しく親しんで先人の営みを五感で感じ、より豊かな暮らしの実現やまちづくりにつながればと願っています。

- 飯島陣屋こどもの日(5月5日)
- お陣屋行燈市無料開館(7月下旬)
- かまどで新米を炊いて食べよう!(11月)
- ビッグな書初め&繭玉づくり(1月)
- 真冬の陣屋で一泊二日(2月初旬)
- 戦国動乱!本物の城跡で合戦(3月)
- 陣嶺館特別開館(春・秋)

飯島陣屋の定例行事

(詳しい日程はお問い合わせください)

オモシロイ! 飯島陣屋の催し

出来事あれこれ

飯島町の文化 江戸~明治



久々の陣嶺館の展示会は連日大にぎわい

伊那の三女、桃澤夢宅、宮下正岑、飯島為仙、大島蓼太、松崎我蝶、桃澤茂春など郷土の歌人俳人をはじめ、白隠慧鶴、正岡子規、伊藤左千夫、秋山好古などの資料も展示され、連日大勢の観覧者でにぎわいました。

第20回文化財めぐり

毎年11月3日の文化の日に恒例の文化財めぐり。平成23年は20回を迎えた記念に初めて町外へ出かけました。行き先は岐阜県高山市。飯島陣屋と同様にかつて江戸幕府の代官陣屋が置かれた町です。

国重要文化財の荒川家住宅、飯島町田切の獅子頭が展示されている獅子会館、飛騨高山まちの博物館などを見学し、古い町並みを歩きました。

最後に訪れた高山陣屋は、全国で唯一、全体的な規模で現存する江戸幕府の陣屋で、国史跡に指定されています。

もとは飛騨藩主金森氏の下屋敷でしたが、幕府直轄領となった元禄5年(1692)以後代官の陣屋とされ、安永6年(1777)からは郡代の陣屋に昇格しました。飯島陣屋とはだいぶ規模が違いますが、いわば兄貴分の陣屋です。見学してそれぞれのよさを再確認した文化財めぐりとなりました。



高山陣屋前で記念撮影

教員、PTAのみなさん、陣屋でこんなことができます!

電気・ガス・水道などなかった時代の暮らし。写真や映像ではわからない昔の暮らしを体験してみませんか?



昔の道具に興味津々

昔の道具、昔の暮らし(小3)

ひいひいひいおじいちゃん・おばあちゃんの時代(150年前ごろ)の暮らしを体験できます。昔の建物をじっくり観察。火打石で火を起し、雨戸を閉めると昼間でも真っ暗な部屋の中で昔の明かり(ろうそく・あんどん・ちょうちん・がんどうなど)を体験。現代の照明とは大違いの暗さ。最後に囲炉裏で餅を焼くと「おうちで食べるよりおいし〜い!」と感嘆の声。駕籠に乗る・担ぐ、わらじを履くなどの体験もできます。



乗り心地も重さも体験するとわかります

信州いいなかり山博覧会イーラ



囲炉裏を囲んで大人の時間

NPO法人飯島中川政経人会議が主催し、地域の魅力を楽しむ体験交流型イベント「信州いいなかり山博覧会イーラ」。平成23年秋に飯島町と中川村などで64プログラムが計画され、飯島陣屋では3つの催しが開かれました。

その1は「秋の酒とすっぱ辛きのこ料理を楽しむ夕べ」。飯島町の名物調味料「すっぱ辛」と旬のきのこ、そして酒屋さん一押しのお酒がそろい、秋の夜長に囲炉裏を囲んで粋な大人の時間を楽しみました。



新米のご飯と究極の一汁一菜を味わう

その2「飯島に息づく人形師たちの記録と舞台」は、飯島町を拠点に世界各国で絶賛された人形師、故岡本芳一さんの記録映画と、弟子の飯田美千香さんによる人形芝居の上演。行灯とろうそくの明かりの中で人形と人間の織り成す幻想的な世界に引き込まれました。最後は参加者が飯田さんのレクチャーで人形遣いに挑戦しました。

その3「かまどで新米を炊いて食べよう!」は、飯島産はざ掛け米をかまどで炊き、囲炉裏で焼いた丸干しイワシと味噌汁の究極の一汁一菜の昼食を味わいました。後日、首都圏から飯島町への移住を検討されている方向けのツアーでもこのプログラムを開催し、好評でした。今後は通年でご希望の日時に開催します。詳しくはお問い合わせください。

学級親子レクで

電車でお越しなら飯島駅から駕籠に乗って陣屋へ。かまどでご飯を炊いたり煮物を作ったり。囲炉裏で魚を焼いたり、ギンナンを煎ったり。その間に竹で箸や器づくり。お父さん・お母さんも楽しいですよ。

糸車の実演(小1)

国語の教科書に載っている「たぬきの糸車」のお話。糸車ってどんなもの? どうやって使うの? 本当に「きいからから」って音がするの? ...それでは、実際に糸車で糸を紡ぐ様子をお目にかけましょう。出前授業も可能です。

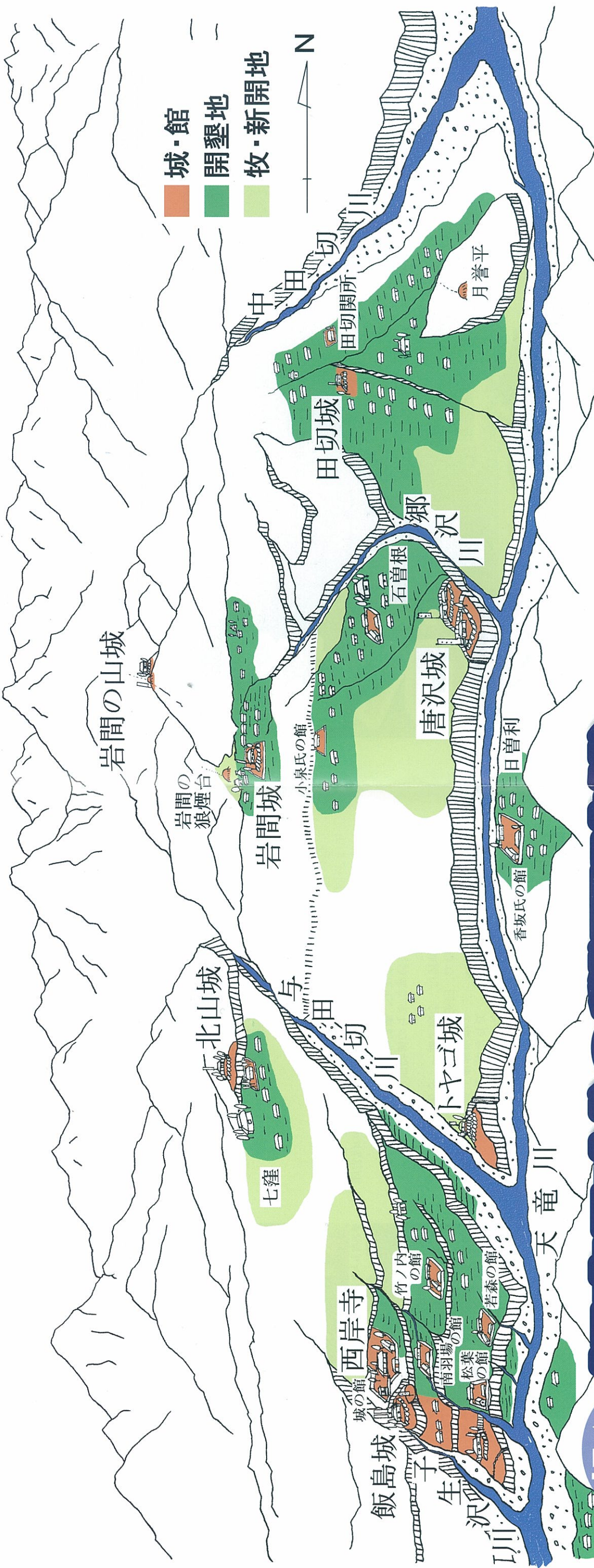


へー、糸ができていくー!

ほかにも...

クラスで宿泊体験、冬季休館中なら百人一首大会、お茶・生け花・邦楽などのクラブ活動、折り紙・お手玉・裁縫などの教室としての利用も可能です。

※このような利用は予約が必要です。お早めにご相談ください。
※町内の小中学校が教育目的で利用する場合の料金は無料です。
町外の学校の場合は所管の教育委員会から減免申請をお送りください。学級レクなどの場合は通常の入館料が必要です。



城館跡ガイド

(1550 ~ 80年ごろ)

飯島町域の戦国時代

原図：伊藤 修氏

想像図

田切城と田切関所

■中世、田切には飯島氏一族の田切氏が力を持っていた。十四世紀後半ごろの「田切神五郎為茂」(一四〇〇年)の大塚合戦に参加した「田切五郎為茂」(一五〇五年)に田切の大明神に「田切為清」の名が知られる。

■田切城は現在の田切公民館から西側の一角にある。公民館の西一〇〇mに土塁、その西側に堀の跡が残っている。「平林城」とも呼ばれたらしい。眺望がよく、中田切川上流から天竜川東岸の吉瀬まで一望できる。

■中平の北方、神社東側や南側の円通庵東側にも田切氏の館跡といわれている所がある。

■甲斐の武田氏が伊那谷を平定した後、田切関所が設けられ、堀無手右衛門が関守を務めたという。現在近くには「関の地蔵尊」が祀られている。関所を避けて西側の裏山を通行する旅人を追いかけて引き戻したことから「追引」の地名がついたと伝えられる。

■中平の集落から比高五〇mの台地「月嘗平」は、狼煙台だったとも伝えられる。

唐沢城と小泉氏の館

■石曾根には、すでに平安時代に諏訪神社の南に集落が開けていたらしい。下つて十四世紀後半には「石曾根孫七」の名が知られる。

■唐沢城は唐沢川が天竜川に合流する地点に位置する段丘の城。主郭は東西八〇m、南北五〇mで北側に土塁が残る。北東・南の三方が段丘崖で、急斜面に腰曲がある。西にはかつて空堀で区画された三つの郭があった。昭和五十年、二郭と南郭で発掘調査がおこなわれ、住居・柱穴・配石・溝などの跡が確認され、陶磁器類・金銀製品・砥石・炭化した穀類などが出土した。それ以前には天目茶碗・槍先・刀剣・武器・古鏡・古銭などのほか、東方傾斜面で見つかった米や雑穀が見つかっている。

■唐沢城は天文三年(一五三四、西)箕輪中条(伊那市)の領主唐沢隼人助源昌綱の子唐沢備前守義景がここに移って館を構えたのが始まりという。ただし、それ以前に石曾根氏によって前身の城が造られていた可能性もある。地名を新井というので「新井の城」とも呼ぶ。弘治二年(一五五二)、唐沢氏は武田氏の伊那侵攻によって滅んだ。

■その後武田氏によって小泉郡唐沢城の小泉五郎左衛門がここに移され、その子新左衛門は石曾根姓を名乗ったと伝えられる。小泉氏は江戸時代に飯島陣屋が置かれた地にも館を構えたといわれている。天正十年(一五八二)、小泉氏は織田氏の伊那侵攻によって滅んだ。

岩間城と狼煙台・山城

■岩間氏の祖は南信濃源氏の一族である片切(片桐)氏。十二世紀末、片切氏から分かれて飯島町本郷にきた為綱が飯島氏初代となり、続く為光の子が為弘が岩間へ来住して岩間氏が興ったという。

■岩間城と呼ばれている場所は、岩間氏が日常生活した館。昭和五十四年、城跡の一部が発掘調査され、南北方向に約三〇m続く堀が確認された。出土した陶磁器から館の存続時期は十四〜十六世紀と考えられている。

■岩間城の西三〇〇m、中央道西脇の丘陵に狼煙台があった。館から近く眺望が利く。北は本沢川に落ちる崖で、残る三方には堀が回る。

■岩間城から一・五km西の山に山城がある。尾根沿いの松並木は「細杉山の森」と呼ばれ、飯島区によって整備されている。御嶽神社の祠が祀られている標高九六四mの山頂は見張り台でもあり山城の防衛点でもある。ここを越えて登山道を二〇〇m進むと山城に至る。東西二二m、南北一七mの主郭を中心に堀が掘られ、いくつかの細長い削平地がある。ここは岩間氏の狼煙台と言われてきたが、守りは堅く道なる狼煙台とは思われない。緊急時に立てこもるための山城の性格が強い。

■ふもとに館、物見を兼ねる狼煙台、山中の詰め城の三点セットは、戦国時代の典型的な姿。

■飯島区の西山にはほかにも、与田切川横ヶ谷夕湖の辺りに二町歩ほどの「古城」と呼ばれる場所があったという。町民の森となっている「池の平」は修験道場だったという言い伝えもあるが、戦乱時に逃げ込む絶好の場所とみられる。西山のあちこ

ちに地城住民の避難場所が存在した可能性はある。

香坂氏の館

■日曾利の集落は飯島町では唯一天竜川の東に位置する。中世には「天草郷」の一部で、大瀬村大河原を拠点とした南朝方の香坂氏の勢力下だった。天草や、中平郷の高良、吉瀬とのつながりが強かった。

■日曾利の香坂家は大河原城主の香坂氏と関係が深いといわれるが、詳細は知られていない。館は集落の西端にある。館の西は天竜川に落ちる段丘崖で、対岸の唐沢城など飯島方面が一望できる。

トヤゴ城

■与田切川の左岸、天竜川に合流する地点の断崖上に立地する。本郷地帯から垂直に切り立つ崖が見えるが、注意してみると上部に大小二ヶ所くぼんだ堀の跡がわかる。大きな堀の東が主郭で、堀は主郭の北を回って天竜川方向へも落ちている。主郭の西に二郭、三郭が連なる。主郭から東へ尾根沿いに川原へ降りる道は、本郷から飯島への通路として近年まで使われていた。

■城主などのいわれや記録がなく、謎に包まれている。城の性格を考える上では、本郷方面の眺望が利くことや、天竜川の水運に関わる可能性が指摘されている。

北山城

■七久保には十五世紀には北村を中心集落が成立していたとみられる。北山城はその集落の西の丘陵上に位置する。千人塚城ヶ池からは南東方向に二〇〇m下った丘陵先端にあたる。水田東の山林に東西六〇m、南北五〇mの郭があり、周囲に二重の堀がめぐらされている。

■北山城には船山城片桐小八郎景重の家臣上沼氏が居住したという。その子孫が天正十年(一五八二)織田氏の侵攻によってこの城とともに滅んだと伝えられているが、この地が戦場になった史実は今のところ確認されていない。

飯島城と飯島氏の館

■十二世紀末、片切氏から分かれた為綱が飯島町本郷に来て飯島氏初代となったという。当時は本郷に「飯島」の地名があり、その地名を名字とした。以来、子孫、天竜川から中田切川の範囲に勢力を持ち、その地域が「飯島郷」と呼ばれるようになった。

■飯島城は、飯島町と中川村の境を流れる子生沢川の左岸に位置する。天竜川を東端として東西約八〇〇m、南北は最大四〇〇mに及ぶ巨大な城。現在は城のほぼ真ん中を南北に国道一五三号が貫いている。

■飯島城を東から見ていくと、まず天竜川を見下ろす位置に「城山」がある。これを主郭と見ると、五〇mの堀の「古城」と呼ばれる堀を隔てた西に二郭の「古城」、さらに堀を隔てて三郭の「前の田」が続く。

■前の田の西の比高二〇mの段丘を登ると国道一五三号が横切っている。この国道は掘り下げて造られていて、元は西側の平坦面が続いていた。この地籍名は「陣垣外」。この平坦面の中央を南北に「相の堀」が掘られており、その西は「古町」と呼ばれる。古町は飯島城の城下町で、うなぎの養殖のような町割だった。

■古町の西には比高五〇m以上の段丘崖がある。段丘や段丘の絶壁に築かれた崖を登ると飯島城最上段の「本城」。「登城」に至る。本城は東西一〇〇m、南北七〇mほどで、西側と北側に土塁と堀が残っている。本城を主郭とする堀を隔てられた北側に二郭の築城があった。東西一二〇m、南北四〇mの規模だったが、その西の三日目堀、さらに西の外堀とともに今は残っていない。

■古町から城山にかけて、北麓を「相の沢(十王堂沢川)」が流れている。人の手によって川筋が変えられ、城の外堀とされたのではないかと考えられている。

■飯島氏一族が住んだと目されているのが「若森の館」「松葉の館」「南羽場の館」「竹ノ内の館」の館。出土品から見ると若森の館周辺は十二世紀後半〜十四世紀前半と最も古い。水いで南羽場周辺は十四〜十五世紀のものが多い。古町は十五世紀後半〜十六世紀初頭に営まれた。戦国時代になって飯島城が本格的に整備され、職人などが城下の古町に集住したとみられる。